

『ひとりじめアイドル　　～アイドルカノジョとオフを一緒に～』

特典シナリオ台本

【登場人物】

井澄由宇（いすみ・ゆう）

駆け出し人気アイドルグループのリーダーを務める由宇は、

「あなた」の幼馴染で恋人同士でクラスメイト。

明るく人懐っこい由宇は、学校でも人気者。

休み時間にもひっきりなしにファンがやってきて、快く応対している。

そんな由宇は、実はあなたのことが大好き。

幼い頃から夢を追いかける由宇を応援してきたあなたを、

由宇は誰より大事に想っている。

由宇の前で一番輝きたくて、一番カッコいいところを見せたい。

そう思いつつ、あなたに全力で甘えたい・イチャイチャしたい欲求も…。

季節は初夏。

忙しい由宇が久しぶりにオフの日。

ずっと前から約束していたデートの日を、二人はめいっぱい満喫しようとお互いに意気込むのだった。

《年齢》17歳《身長》158センチ

《バスト》D

私

由宇の幼馴染。

努力家の由宇をずっと応援していた。ずっと憧れの相手。
今では由宇のアイドル活動の追っかけもしている。

幼い頃から由宇の面倒をよく見て、心身ともに支えてきたパートナー。
家庭的なことが得意で、料理や裁縫、細かい手仕事が好き。
家族ぐるみの付き合いがあり、家族同然に接して、
オフの日はめいっぱい甘やかしている。

【あらすじ】

あなたは、幼馴染で恋人の由宇と同じ高校に通う2年生。
由宇は昨年からアイドルになり、最近では名前も売れてきて忙しく活動していた。
校内にもファンが増え、一緒に過ごす時間は減る一方。

2

そんな初夏の休日。

由宇は時間を作って、久しぶりのオフをあなたと一緒に過ごすことに。

このデートで、由宇は今まで我慢した分だけ
大好きなあなたにいっぱい甘えて、たっぷり充電している様子。

ステージで輝く由宇が、あなたにだけ見せる「幼馴染の顔」と「恋人の顔」。
アイドルカノジョの素顔をひとりじめする音声作品。

【EP01：もしもし、おはよう】

○あなたの部屋

朝、着信のバイブレーションで目を覚ます。

「（嬉しそうに）あ……もしもし？ おはよう。由宇でーす」

「……おはよ？ 目が覚めたかな？」

（あなたからの返事を待って）……うん、おはよう」

「無事に起きてくれてよかった」

「……まだ声、眠そうだね？」

（小声で呼びかける）おきておきてー」

「私？ うん、この通りばっちり起きてるよー」

「……今日ずっと楽しみだったんだ。

だから、予定より早く目が覚めちゃった」

「それじゃあ、またあとで。駅前で。うん、西口ね」

「あー、待ち遠しい。楽しみっ」

「……じゃあ、またあとで。ばいばいっ」

「あっ。そうそう……」

（囁き声で）愛してるよー（笑う）」

「気をつけて来てね。はい。切りまーす」

「……わー、切りたくなーい」

「でも、出かけられないもんね？（笑う）
はい。今度こそ、切ります」

「またあとで。ばいばいっ」

【EP02：おしのびアイドル】

○ 駅前

駅前で待っているあなた。

小走りで現れる由宇、マスクを着用している。

「（軽く息を切らせて）ごめん、待った？ そうなの、改札逆から降りちゃって。うっかりしてたー」

「急がばまわれ、ほんとにそれ……（息を整える）」

「（マスクを外して、囁く）……今日はありがとうっ」

「……ごめんごめん、ちゃんとつけます」

「まあ、きみに迷惑かからないようにね？
万が一に備えて……」

「（マスクをつけ直す）よし」

「だいじょうぶだよ。

（嬉しい気持ちの吐息）……もう、心配性だなあ」

「……うん。マスクは、あったほうがいいね」

「私、今日ずっとニヤけてると思う」

「合流してからもずーっと口角上がりっぱなし。やばい」

「（しみじみと）……はっつ。

今日という日を待ってた。嬉しい」

「ありがとね」

「……じゃあ、はい。手、繋ごう」

「デートだもんね？ ……甘えていい？」

「（小声で）やったー！」

「今日は、めいっぱい充電させてもらいます」

「……じゃ、行こっか」

【EP03：リトル・ファッションショー】

○ファッションビル

ティーン向けのアパレルが入ったファッションビル。

店内を物色する二人。

「やっぱりもう夏物少ないかー。」

あ、でも見て、安くなってるよ」

「新作もかわいいねえ……」

この機会に、秋もの買っちゃうのもいいかもね」

「決めたっ。どっちも買っちゃお」

「今日のご褒美の日ー」

「そう、怒涛のスケジュールだったー。」

楽しかったけど、うん。お仕事も楽しかったけど……」

「（あなたに甘えて）会えなくて寂しかったの………！」

「（笑って） 一番のご褒美は、久しぶりのきみだぞっ」

「……あ、見て。あれ、かわいい。ほら」

売り場を移動する。

「白いブラウス。夏っぽい」

「きみこれゼったい似合うよ、これ。キープキープ」

「あとスカートは……」

服を物色する由宇。

「こういうの」

「ワンピースもいいね」

鏡の前。

あなたの背後から密着して、服を重ねる由宇。
後から耳元に話しかける。

「（囁き声で）……ほら、かわいい」

「（通常の声で）こういうの好きでしょ？
ね。ひらひらのやつ」

「私も好き。こういうのすごく似合ってて、
かわいいんだもん」

「着てみて着てみてっ。見た」

「私の服は、あとまわしでいいのっ」

「今日は、いっぱい可愛い服着たところ見たいんだもん」

「おねがいっ」

「（あなたの返事を聞いて）……やったー♪」

「それじゃあ、お願いします」

「ちょっと待ってて。試着室開いてるか聞いてくる。
店員さんは……（視線を巡らせて）あ、いた」

「大丈夫だったっ。行こっ」

試着室へ移動。

「それじゃ、私ここで待ってるから」

「一着ずつ、着替え終わったら呼んでね」

「ふふー（満足そうな笑み）。
私のためだけのファッションショー、開幕」

「（カーテンを閉めながら）おねがいします」

「……（そわそわ待つ吐息）」

「ふふっ……」

着替えるあなた

カーテン越しに由宇の声が聞こえる。

「……着れたかな？」

「ゆっくりでいいよ。わー、楽しみ」

「……（そわそわした呼吸）」

遠慮がちにカーテンを開くあなた。

「あ♪ おつかれっ。見せて見せて」

「んっ……！！ かわいい……！！ いいじゃん、いいじゃん」

「白いブラウス、これ一着持ってるといいよ。
家にあるスカートとも合うと思う、
ほらあったじゃんフレアの」

「覚えてる覚えてる。かわいかったから」

「このスカートもかわいいねえ、かわいいねえ」

「似合ってるよー。……この丈、落ち着かない？
そっかあ」

「あんまり脚出さないもんねえ。

じゃあ、とりあえずスカートは戻そうか」

「……次は、ワンピースっ。待ってまーす」

カーテン越しに声が聞こえる。

「そっちのワンピースなら、丈長いし。いいと思う」

「……ふふー。嬉しいな」

「……（吐息。そわそわ、わくわく）」

「……着れた？」

ちよっとカーテンを開くあなた。

「あれ？ どした？」

「あ。後ろ？ おっけー、手伝う」

「ごめんね、お邪魔します、っと……」

試着室に入る由宇。

「どれどれ……？」

試着室で密着するふたり。

あなたの背後、首筋に手を触れる由宇。

「あー、これね。首の後ろの……」

「こういうリボンはね、

着る前にちょっと形作っとくといいよ」

首の後ろで止めるリボンを結ぶ。

「（リボンを結び）……ん。こんなかんじ」

「……大丈夫？ 苦しくない？」

「（微笑んで、耳元で囁く）思った通りだ。かわいいよー」

「ほら、鏡見て？」

「……」

「（耳元で）ぎゅー……ふふっ」

「かわいくてつい……（くすくす笑う）」

「（深呼吸）はぁ……、あったかい。
こどもみたいにポカポカだねえ」

「不足しがちな必須栄養素が補われる……」

「うん。ずっと足りてなかったから、沁みるよぉ……」

「……（深呼吸）」

「このワンピース、ちょうかわいい」

「ま、素材がいいから……ね。うん。
そうだよ、きみは素材がいい」

「私は努力と技術だけど、
きみは天然素材だからね」

「うそじゃないもん。ほんとほんと」

「（身をすり寄せて）……びとー。あー、吸い寄せられる……」

「やばいやばい……吸引力がやばい……」

「だってさー……学校でもさ……
もっと遠慮なく話しかけてほしいのに」

「きみ、すぐにひとに譲っちゃうでしょ？」

「お昼一緒に食べてても、私のファンっぽい子が来るとき、
『私はいいので、どうぞどうぞ』みたいな態度でさー」

「私は、きみに会いに学校に行ってるのにー」

「……幼馴染だからって、遠慮することないじゃん？」

「そりゃあ、ありがたいよ。」

同じ学校の子も応援してくれてて、それは嬉しいの」

「まあ、私がモテてるところを見るきみも、
嬉しそうだし……」

「きみがニコニコしてるから、いいんだけどね」

「（深呼吸して）ふー……今日は、いっぱい取り返すっ」

「（気分を切り替えて）はい。
では……失礼しましたー……」

「着替え終わるの、外で待ってまーす」

試着室を出ていく由宇。

「はい、おつかれー」

「私のと一緒ににお会計しちゃうから、ちょっと外で待ってて」

店の表へ移動して、由宇を待つ。

「おまたせー」

「はいっ、これ。プレゼントってことで」

「誕生日、お祝いできてなかったじゃん？」

「ぜひ、もらってください」

「で……いっぱい着てね？
それで、いっぱい一緒に出かけよう」

「うん。約束♪（笑う）」

「あ、帰りに渡すから。今は私が」

「（荷物を持とうとするあなたを制して）……いーのいーのっ」

移動する二人。

「……お？」

「おー、貼ってあるー。嬉しいー」

同じフロアの別店舗、CDショップの店先。

由宇の所属するグループのポスターが掲示されている。

「うん、新しいCD。
セカンドシングル」

「もうすぐ発売だねー。楽しみ」

「いやぁプロの仕事はすごいなー」

「私でもアイドルみたいに写ってる。
いや、アイドルなんだけどさ」

「プロだよねえ。メイクさんも衣装さんも、
カメラさんもデザイナーさんも……」

「ねー、とびっきりかわいく撮ってもらっちゃったよ」

スマホでポスターを撮影するあなた。

「撮るの？ ちょっと照れるなあ」

「そんなに撮る？（照れ臭い笑い）」

「え？ ポスターとツーショット？
どうぞどうぞ、シャッター押しますよ」

ポスターの隣に並ぶあなた。
シャッターを押す由宇。

「はい、撮りまーす。……どういふ状況？（笑う）」

スマホカメラのシャッター音。

「いい笑顔〜。はい、データ確認してみてください。
ちゃんと撮れてる？ よかったよかった」

「（小声で）……本物がここにいるんだけどなー」

「（冗談で拗ねてみる）そりゃあプロが整えたやつの方が
お綺麗かもしれません（笑う）」

「（耳元へ囁く）……ちゃんとこっち見て」

「（囁き声で）今日は私、きみだけのアイドルだし」

「……あ、ほらほら。お客さんきた」

「（小声で） って……あの人もポスター撮ってる」

「誰推しなんだろ。気になるね」

「……（息をひそめる）」

「（ほっとして）ふーっ……」

「気づかれなかったね。ポスターに写ってる人間、後ろにいたのに（笑う）」

「（笑って）ドキドキしたー」

「ドキドキした？（あなたに同意して）ねー」

「はー、おもしろい」

「……（引きずって、くすくす小さく笑う）うん、行こっか」

【EP04：木漏れ日シエスタ】

○ビル街の中の公園

「ベンチ空いてた。ラッキーだね」

「（わくわくして）ランチ楽しみにしてたっつ」

「お弁当、作ってくれたんでしょ？
うれしー……！」

「開けて開けてっ」

ランチボックスを開けるあなた。
サンドイッチとおかずのお弁当。

「わぁっ……」

「かわいいっつ。すごい」

「待って、撮る撮る」

「作るの大変だったでしょ？
はあ……好き……っ！」

「器用だねえ。ますます磨きがかかったねえ」

「それじゃあ……いただきます」

「んー……（たまごサンドを咀嚼、嚥下）」

「はあ……おいしい……」

「分厚いたまごサンド好き……」

「ほんと、料理上手だねえ」

「中学のときかな？」

自分でお弁当作ってるって聞いてさ、
『お弁当って自分で作れるんだ！？』って衝撃だった」

「しかも、かわいいんだもんなあ……
色とりどりだし、バランスいいし」

「（しみじみと）はー……うれしー。
ずっとこういうピクニックしたかったの」

「お弁当箱もかわいいー。こっちは？」

「（蓋を開けて）あ……さくらんぼ入ってる。
やばいー（喜ぶ）」

あなたの肩にもたれかかる由宇。

「（耳元で囁き）私の大好物、覚えててくれたの？
……嬉しいなあもう」

「大事に、大事に味わって食べます。では……」

「……（咀嚼。嚥下）」

「はぁ……おいし……」

「んー……（咀嚼。嚥下）」

「これもおいしいっ。天才だなあ……」

「……（咀嚼。嚥下）」

「ふう……」

「……（咀嚼。嚥下）」

「んく、んくっ……（ペットボトルの水を飲む）」

「はぁ……」

「では……さくらんぼも、いただきますっ」

「ふわあ……宝石のようだねえ、きれいだねえ」

「あむ……っ。ん……」

「ん……、優しい甘みだあ」

「ほら、きみも」

「（囁き声で）あーん」

「……ふふっ。おいし？」

「でしょー」

「でしょーって、ねえ？」

「私が言うことじゃないね？」

「私が用意したんじゃないのに、ねえ（笑う）」

「（冗談めかして）結構なものを、ありがとうございます、ほんとに」

「最高だよお。もう、大満足」

「（無声で）はむっ……ん……」

「（無声で）んゝ……。はむ……」

「ああ……最後の一粒……」

「いただきますっ。んむ……」

「……………（嚥下）」

「（しみじみと）ごちそうさまでした」

「美味しかったあ……」

「はあ……」

あなたの肩に頭をあずける由宇。
眠たそうに喋る。

「うん。ちょっと眠たくなってきたあ」

「いい天気だし、お腹いっぱいだし、
きみはあったかいし……」

「あー、気づかれちゃった？
お仕事忙しかったの、今日のため……」

「今日と明日は絶対オフにしようと思って、色々と調整してもらってたの」

「だって……限界来てたから」

「きみをたっぷり吸わないと。必要だから」

「だから……、手繋ぎたいなー」

「いい？ やった」

「（手を繋ぎながら）……ん」

「（耳元で）ありがとう」

「あー……すごい、きもちいいかんじ……」

眠気におそわれる由宇。

「やばい……落ちる……」

「……（寝てもいい？の意で）いーい？」

「うん、五分だけ……ちゃんと起こしてね？」

「おやすみー……」

「……すう、すう……」

「ふや……、ん……」

「……すう、すう……」

「（無声の寝言）……ん……似合う……」

「……すう、すう……」

「……ん……」

「（目覚めはじめて）うん……」

「あ……うん。起きたあ……」

「……えへへ。手ぎゅってしちゃった」

「……おはよー……（嬉しそうに笑う）」

「あー、起きてすぐそばにいるの、嬉しい……」

「（笑って）……はあー、夢の中でもデートしてた。おもしろい」

「仮眠とってすっきりしたっ。

（小声で）今日一日、まだまだ楽しんでっおー」

「うん。行こっ」

【EP05：ひかりあふれる】

○あなたの家・玄関先

ふたりで一緒に、あなたが家族と暮らすマンションにやってくる。
今日は家族は不在。

「お邪魔します……」

「……よし、二人きりになれたぞ」

「（キスしようとして）……んっ」

キスをマスクに阻まれる。

「っと……マスク邪魔だね……（マスクを外す）」

「（頬に）ちゅっ……」

「……（照れ笑い）やっとキスできた」

「はぁ……沁みたぁ……（噛みしめる）」

「（照れ笑い）……」

○あなたの部屋

「わー、久しぶりだなあ」

「今日おばさんたち帰ってこないんだよね？
そっかー、よろしく伝えておいてね」

「ねー、しばらく会ってないもん。会いたいなー」

「こんど家族も一緒にさ、またご飯行きたいね」

「まあ……時間できると、
ふたりっきりのお出かけを優先しちゃうんだけど」

「（上機嫌に笑いつつ）お泊りうれしー。
高校入って初じゃない？ ねえ」

「うん。次はうちにも泊りにきてね。
いいよいいよー、おもてなしする」

「さて……じゃあ早速、これ」

「着替えよーぜっ」

「……だいじょーぶ、見ない見ない。
着替えてるところは見ないから」

「後ろむいてまーす」

後ろを向く由宇。

今日買った服に着替えるあなた。

「わくわく……わくわく……」

「（笑う）……」

「……できた？」

「（歓声）……！」

「いいねー！　かわいいねえ、かわいいねえ」

「後ろ、自分でもできた？　首のそこ。リボン」

あなたのそばへ歩み寄り、

首の後ろを点検する。

「あ、うん。いいじゃん。いいかんじだよー」

「撮っていい？」

スマホで撮影をはじめる由宇。

「（嬉しそうに笑いながら、撮影）……」

「これねー、疲れたときに見る用なの」

「私のお守りにするから」

「うん。お守り、だよ」

「（照れるあなたへ）いいじゃん、
だってきみの待ち受けも私の写真でしょ？」

「知ってるよおー。しかもさ、ジャケットとかじゃない。
アー写。事務所の宣材資料のやつ」

「なんで？（照れて笑う）　せめてジャケットにしてよー。
今日とったポスターでいいから」

「（笑いあう）……」

「あとね、もうひとつ、お守りがあるの」

「これ」

今日、ひそかに買った指輪をあなたへ差し出す由宇。

「へへー。さっきね、服と同じところで買ったの。シンプルでかわいいでしょ？」

「ほら、おそろい」

「気に入った？」

うれしい。……つけてあげる」

接近するふたり。

あなたの指に指輪をつける由宇。

「……左手の、薬指。いい？」

「やった♪（小声で）つけまーす……」

「（指輪をつけながら、吐息だけで笑う）……」

「（つけ終わって一呼吸）……よかった、ぴったり」

「うん。私達、手のサイズおんなじだもんね」

「……つけてくれる？ 左手の、薬指」

「外ではこの指につけられないけど……今だけ」

「きみと一緒にいるとき、限定で」

「（指輪をつけてもらって、小さく笑う）……ちよっとくすぐりたい」

「（指輪をつけ終わって）……うん。
サイズ感もばっちり。ありがと」

「……（嬉しそうに眺めて幸せそうに笑う）」

「ほらほら、おそろ〜」

身を寄せ合って、腕を突き出し、
おそろいの指輪をはめた手を眺めるふたり。

「……どこにいても、これつけてると、
ふたりで手を繋いでる気持ちでいられそうじゃない？」

「勇気がほしいときもあるから。
そういうとき、頼りにしまーす（笑って）」

窓の向こうで花火が上がったことに気付く。

「あっ」

「始まったよっ」

窓を開け、ベランダへ出るふたり。

「うんうん、見える見える」

「遠いけど、ちっちゃいのもかわいいじゃん」

「見てほら、あれ。指輪みたい（笑う）」

「（見惚れる沈黙）……」

「（花火を見て）おお……」

「（笑う）あー、きれー……」

「……（花火を見つめる沈黙）」

「手、繋いでいい？ ……ありがとう」

「（あなたの手を握って、微笑）……」

「（耳元に囁く）指輪つけてるきみの手、なんかドキドキする」

「（囁き声で）うれしい」

「……（花火を見つめる沈黙）」

「昔もさ、ここで花火見たよね。

このベランダの柵よりもっとずーっとちっちゃかった頃」

「ここのところ、格子掴んで……」

「あのとときより、今のほうがずっとよく見えるね。
背が伸びたんだね？（笑う）」

「今になっても、こうやって一緒に花火見れるの、
すごいよね。嬉しい」

「色々変わっても、ぜんぜん変わんないね。私達」

「（幸せそうに、吐息で微笑）……」

「……おー、すごい。大盤振る舞い」

「……もう終わっちゃうのかな？
あー、もういい時間だね」

「……（花火を見つめる沈黙）」

「（小声で囁く）終わるまで手繋いでようっと」

「……（花火を見つめる沈黙）」

「わー……すごい」

「（見惚れて）きらきら……ひかりがあふれてる……」

「（息をひそめて見守る吐息。十秒ほど）……」

「はー……終わっちゃった……さみしいー」

「毎年けっこう派手になるよね。」

「うん、良い」

「あー……今日、浴衣着てる人いたよね」

「浴衣デートもいいなあ」

「打ち上げ会場は屋台出てるのか……
行きたいねえ」

「ここから見えるから、
会場まで行ったことってないよね」

「来年、思い切って行ってみる？」

「混んでるのかなあ。
それもまあ楽しそうだし」

「ほら、混雑してるほうがバレないかも？
暗いし、みんな花火見に行ってるわけだし」

「なんだっけ、そういうの。
隠すなら……木の実を隠すなら？」

「木の葉か。そうだそうだ。
木の葉を隠すなら森だから」

「ね。じゃ、来年は浴衣で花火大会行こうっ」

「（わくわくした気持ち。笑う）……」

「あ、今年、いまのが初花火？」

「私は、実は先週見てた」

「金曜日の夜。そう、イベントのラストで花火がパーンって」

「うん、綺麗だった」

「朝天気悪くて、野外だからさ、
どうなるかなって心配だったけど晴れたし」

「大成功でよかった。嬉しかった」

「楽しかったよー」

「（満足げな吐息）……きみにも見せたかったな」

「自分でも、いいパフォーマンスできたと思って、手応えあって」

「平日じゃなかったらねー、きみにも来てほしかった」

「でもね、次はもーっとすぐやるから」

「ぜったい楽しませるから」

「きみがどこにいても、どんな遠い席にいても……」

「ぜったい見つけて、指差すよ。私」

「ばーんってやつやるから」

「（笑って）楽しみにしてて」

「……約束。指切げんまん」

「うん。ほら。」

「……うそついたら、はりせんぼん。のーますっ」

「これ、懐かしいね。久しぶりにやった」

「（小さく笑う）……部屋、入ろっか」

【EP06：ひとりじめ、ふたりのゆめ】

○あなたの部屋

あなたのあとでお風呂に入った由宇が戻って来る。

「（部屋に入りながら）お風呂いただきましたー」

「（匂いをかいで）シャンプー、いいにおーい。
これ好き、どこのやつ？」

「あ、うれしー。UR」送って送って」

「（嬉しそうに笑う）そのパジャマもかわいいねー」

「（落ち着いた吐息）……ふー」

あなたの隣、ベッドに腰かける由宇。

「へへへ。机のところに、昔の写真飾ってあるの見ちゃった」

「小学校のときの。ね、合唱祭の時のやつ」

「同じの、私もまだ飾ってる」

「あと気になったんだけどさ」

「私のブロマイド、ちょこちょこ飾ってあんの……
この部屋だけじゃなくて」

「あの、階段のそこ、踊り場の飾り棚？」

「ご家族の集合写真の隣に飾ってあった、
シングルのショップ特典のやつ……」

「（頭を下げながら）いや、お買い上げありがとうございますーす」

あなたは、ひそかにファイリングしていた
由宇のブロマイドコレクションを、
学習机の棚から持ち出す。

「え？ うそ、ファイリングしてるの？ それ？」

「いや、そんなに種類まだないでしょ
……うわ同じ柄だ……すご」

「嬉しいけど恥ずかしい。
恥ずかしいけど……嬉しい」

「けど……恥ずかしい（笑う）」

「えー、見せて見せて」

「（ファイルをめくりながら）几帳面だねー……」

「これ？ お気に入り？」

「うん、すごい写真うつりいいの。
映えてる。これはね、映えてた」

「ありがたいことですほんと……」

「……いや、ほんと……（照れ臭い）」

「（ちょっと他人事に）夢中ですなあ」

「高解像度の私がここにいるのになー？」

「（冗談を笑う）あはは……」

「って言っても今はすっぴんなので、
細目で見てほしいけど」

「まー、すっぴんを見せられるのも
家族かきみくらいなものだけどね（笑う）」

「このコレクションファイルが、
ぱんっぱんになるくらい、がんばらさせていただきます」

「応援よろしくお願いします」

「……ふふ（落ち着いた小さい笑い）」

「お布団、はいろっか」

ひとつのベッドに入る二人。

「電気も消します。リモコン……あった」

リモコンで電気を消す。
布団にもぐりこむ由宇。

「……（小さく笑う）さすがにちょっと、このベッドも狭くなってきた？」

「そっち布団かかってる？ 大丈夫？」

「私もへいき。まあ、夏だし。
身体丈夫だし、へーきへーき」

「……（吐息。スキンシップの機会を窺う）」

「（耳元に囁く）ねえ、ぎゅーってしていい？」

「ぎゅー…………」

「……（抱き着いたまま深呼吸）」

「……はぁ……充電満タン……」

「（耳元に囁き）もっとぎゅーっでいい？」

「やった♪ ぎゅー………」

「（首筋に顔を埋めるように）すりすりすり……♪」

「（満足げな吐息）……」

「（幸せそうに）ふふっ……」

「……今日、眠れないかも」

「お昼寝しちゃったしねえ」

「きみは眠いでしょ？」

「……（笑って）ほんと？
私も楽しくて、嬉しくて、眠れないかも」

「……ドキドキするし」

「（ぎゅっとして）あゝ……満たされる……」

「（耳元で）好き」

「好き。ほんと。好き。あー、好きって言うの癒される……」

「（照れるあなたへ）いっぱい言いたいのに。好きっ」

「……（落ち着く吐息、十秒ほど）」

身体を離す。

「さすがに暑いね」

「手だけつないでてもいい？」

「暑かったら……暑くても離さないかも（笑う）」

手を繋ぐふたり。

「……ありがとう」

「ブロマイド、いいなー。私も集めたい」

「うん。きみのブロマイド」

「きみもアイドルになってくれたら、
集められるんだけどな？」

「なれるって。かわいいもん」

「歌もうまいしさ。踊るのも、好きだったじゃん？」

「そしたらさ、私と組もう」

「おんなじ衣装着て、おなじ歌うたって、
ツアーでいろんなところ一緒にまわってお泊りして、
いっぱい写真撮って」

「めっちゃ楽しそう」

「……でも」

「でもなー」

「きみ、人気出ちゃいそうだから……
めっちゃくちゃ忙しくなったりして」

「私よりずっとずっとファンができたりして」

「それはちょっと……妬けるんだよなあ」

「（小声で囁き）ひとりじめしたいから」

「きみは、私だけのアイドルだから」

「だから、今のは、なし。なしなし」

「ブロマイドはね、勝手に作る。

今日撮った写真とかで（笑う）」

「チェキも撮ろ撮ろっ。サイン書くから、書いて」

「えー、書いてよく。大事にする」

「そうだ。こんどお弁当作る時は、通話しよ？
応援したい」

「『おにぎりがんばって』『たまごやき上手ー』
とか言いたい」

「（笑って）そうそう『お水おいしー？』『とか』

「楽しそう。やろうそれ。約束ね（笑う）」

「（話題が落ち着く吐息）……」

「……きみは、私を応援するのが好きでしょう」

「きみは、私を推しててすごく楽しそうで」

「それがすごく励みになるの」

「前にも言ったけど、
私がアイドルになったのはきみの影響」

「……ほんとだよー。
信じてなかった？」

「ちっちゃい頃、一緒に遊んだとき……」

「『ほんとのアイドルみたいだね、かわいいね』って言うてくれた、
あの言葉」

「そのとき思ったの。
私がほんとのアイドルになったら、きみはもっと喜んで、
笑顔になってくれるのかな？　って」

「そこが、スタート地点」

「（照れ笑い）今は、私の夢でもあるけどね。
もっと続けること……」

「もっとおっきいステージで。」

もっとたくさんの人に、
パフォーマンスを楽しんでもらうこと」

「もっともっとキラキラしたものを……見せたい」

「ずっと消えない花火みたいな、キラキラをね」

「（小声で）……がんばるぞーっ」

「（小声で）うん。見守ってて……」

「（嬉しそうなくすくす笑い）……」

「私もね、きみを推してる……」

「きみのことが、最推し。ほんと」

「ほんとだよ……」

「今日は、ありがと。幸せな一日……」

「また頑張る。私、がんばるの好きだから」

「きみに、見せてあげるね」

「もっと、もっときらきらの……」

「私……きみだけのアイドルだから……」

「（あくび）ふわ……」

「だいすき……」

「ん……」

「だいすき……」

「……」

【EPILOGUE：ハミング】

○あなたの部屋

朝。目を覚ますあなたは、まだ半覚醒状態。
新曲の練習をする由宇がちいさく歌を口ずさむ。

「……（アドリブで、歌の練習。ハミング）」

「……（アドリブで、ハミング）」

「（歌をやめる）……あ」

「（囁き声で）おはよう。起きた？」

「んー（時間を確かめる）……まだ早いから」

「もう少しだけ、眠ってていいよ」

「（くすっと微笑む）……」

「（微笑混じりに）……おやすみ」

「（耳元に囁く）……だいすき」

「……
（アドリブで、小さくハミング）
」